

ネパールの今、紛争から平和へ、 変革を求める人びと

世界の屋根、ヒマラヤに位置するネパールは、100以上のカースト・民族と76の言語を擁する多文化・多民族国家です。ヒマラヤをはじめとする豊かな自然や多様な民族文化は、数多くの外国人を魅了し続けてきました。しかし、実際は不安定な政治状況が長年続き、社会は深刻な歪みを抱えてきました。

10年に及ぶ紛争をへて、今年08年5月28日に王制を廃止し、共和制へと移行したネパール。あらたな憲法を起草するための制憲議会のプロセスには、これまで社会の周縁に置かれながらも、社会変革をめざして草の根で活動していた先住民族・カースト・宗教の異なる人びとが多く参加しています。

本稿では、転機を迎えたネパール社会の今、その背景、そして今後の課題について述べたいと思います。

差別からの解放をめざして、紛争から平和へ

約240年間に渡るヒンドゥー高位カーストによる支配の結果、ネパールにはヒンドゥー教的規範が社会全体に深く根つき、差別的な身分制度であるカースト制度と家父長制が、長くダリット（被差別カースト）や女性開発の阻害要因となっ

てきました。

この数十年、開発政策によって女性の状況は改善しましたが、依然としてカースト・ジェンダー・地域間の格差は縮まっていけないのが現状です。また、フォーマルセクターにおける経済活動に就業できる、また意思決定の場にいる女性やダリット、先住民族の数は未だに限られています。1990年民主化以降も政党による腐敗政治が続き、格差や差別問題は一向に解決しなかったのです。

この状況のもと、ネパール共産党毛沢東主義派（マオイスト）は平等社会の実現、制憲議会選挙の実施と共和制の確立を目指して1996年2月に反政府武装闘争を開始。長年にわたって社会の周縁に置かれ続けた先住民族、ダリット（被差別カースト）や女性の心理をつかみ、組織を拡大してきたのです。

ギャネンドラ国王は2005年に内閣を解散させ、マオイスト問題を解決するとの名目で強権的な直接統治に乗り出しました。国王は非常事態宣言を発令し、言論・報道の自由など人権条項の多くを停止し、多くの市民団体、人権団体の活動を弾圧しました。

マオイストは主要政党と国王専制に反対する協力関係を構築し、また多くの一般市民も立ち上が

山本 愛 やまもと・あい

商社勤務、ネパール留学の後、2000年よりNGOアジアボランティアセンターに勤務。ネパールのダリット解放運動と連帯する活動に従事。2007年3月から2008年4月まで、在ネパール日本国大使館経済協力班委員としてネパールに滞在。



って2006年4月の第二次民主化運動を成し遂げました。王制下で圧力を加え続けられてきた女性やダリットをはじめ、被差別マイノリティの当事者団体も先頭を切って街頭で行動し、民主化に貢献しました。

同年11月には政府とマオイストが包括的和平協定を結び、13000人以上の死者を出した10年間におよび人民戦争は正式に終結。2007年1

ネパール草の根の女性リーダーと共に。左側が著者。



月には暫定議会が発足し、マオイストもこれに加わったのです。

公正な社会を求め、立ち上がった女性たち

ネパール女性の社会経済状況は南アジア諸国の中でも厳しい中、様々な立場の女性たちが声を上げ、国王専制下においても自らの権利獲得の運動を展開してきました。「ワーキング・ウイメW W J」を結成したサンギタ・ラマさん(39歳)もその一人。サンギタさんは先住民出身で、大手雑誌社勤務を経て、現在はフリーの記者として活躍中です。ネパールの新聞、雑誌、放送業界の意思決定機関はほぼ全員男性が占めており、報道内容にも女性の視

点が反映されていないとは言い難い状況です。このような状況の下、彼女は2006年に女性記者たちに呼びかけてWWJを設立し、女性が抱える課題を社会に提起し、メディアにおける男女平等を推進することを求めています。「この社会はどこを見ても男中心。どんなに外国から援助が来たって、社会構造を変えない限

りいつまでたっても女性は抑圧されるばかりです」と彼女は力強く語ります。

チャメリ・パリヤールさん(25歳)はヒマラヤを望むネパール西部の山村で育ったダリット女性。「大学在学中に学生組織で活動していた時、国軍に理由なく35日間拘束されました。その後マオイストと出会い、カーストとジェンダー差別の撤廃をめざす理念に共感し、「ダリット解放戦線」(マオイストのダリット下部組織)に迷わず参加しました。様々な意見はありますが、マオイストの運動はこの国に必要だったと思います」。彼女は現在、政党のイデオロギーを超えたダリット女性の連帯を実現させるため、ダリット女性の当事者団体「フェミニスト・ダリット協会(FEDO)」でも活動しています。

制憲議会選挙の結果

本年4月11日に実施された選挙では、601議席を54の政党が争った結果、マオイストが第一党として大躍進を遂げました。そして女性は議員比率33%を達成。過去、ダリット出身女性の議員は皆無でしたが、今回は女性議員の内ダリット女性が24名も当選しています。同性愛を公言し、性的マイノリティの当事者運動で活躍する人も、ネパールで始めて当選しました。

マオイスト圧勝の背景には、既存の政党政治への失望感からおこる新勢力への期待、労働者や貧困層へのマオイストの浸透と、巧みな選挙キャンペーンなどが考えられます。また、10年の人民戦争期間中、一時期マオイストは実質国土の7割を支配下に置いていました。村人、特に底辺の人びとにとって良くも悪くも最も近い存在がマオイストだったと言えます。

今後の課題

王制が崩壊したものの、ネパールが抱える構造的な問題であるカースト、ジェンダー、地域間格差に基づく差別と格差の是正を具体的に実行しなければ、公正で平和な社会を築くことはできません。数多くの被差別マイノリティが参加した議会が、これまで政治化されなかつた課題を押し上げ、平和への道筋を示してほしいと期待しています。

また、多大な犠牲を払った10年間の紛争の記憶は消し去られてはなりません。しかし武装勢力であったマオイストが政権につき、これまでの王室ネパール軍・マオイストによる残虐行為は追求されないまま葬られる方向へ働いています。一方、軍あるいはマオイストにより拘束されて行方不明になっている人は現在も800人以上おり、生存か死亡かの確認すらできていません。真の平和を築くためには「不処罰の文化」を放置せず、紛争犠牲者の声に耳を傾け、正義を実現することが不可欠です。

ネパールにとって日本は主要援助国の一つで、社会インフラ整備などの分野において多額の政府開発援助(ODA)が投入されています。平和構築支援として国連政治ミッションへの自衛隊派遣や、国連機関を通じた資金援助支援が行われています。しかし、社会の底辺にいる草の根の人びとの声に耳を傾け、人権の確立および貧困撲滅に向けた構造的な問題に一層力を入れて取り組むことが、ネパールの人びとから日本に求められていることではないでしょうか。

社会変革への道を歩み始めたネパール。そこで立ち上がる草の根の人びとは、私に勇気と希望を与えてくれました。